

平成20年度
全日本学生ダートトライアル選手権大会
結果報告書



早稲田大学自動車部

グランプリレポート

今回行われた全日本学生ダートトライアル選手権大会の当日の様様をまとめましたので、結果報告とともに掲載させていただきます。

今回大会が行われた丸和オートランド那須では、5月に行われた全関東学生ダートトライアル選手権大会までに7回ほど練習会を行いました。その後はジムカーナの練習会や合宿が続き、思うように練習会が取れず、やむなく大会直前の8月7日に長野県の信州スポーツランドで試合車両を使用して練習会を行うことになりました。大会直前ということもあり、確認程度で練習走行を数本行いましたが、突然、シフトが入らないという症状に見舞われました。原因を追究してみると、シフトワイヤーが切れかけており、クラッチのレリーズベアリングもガタが出ているとわかり、練習会を午前中で切り上げ、大至急部室に戻り整備を行うことになりました。

その後、整備が完全に終了したのは8月8日の午後になりました。また、まともに練習時間が取れず、選手の習熟不足が懸念され、このまま大会に臨んでもかなり勝てる望みは薄いと判断し、急遽予備として保管されていた AE101 用のファイナルギア(4. 3)を投入することになりました。これにより、計算上は今までの純正のファイナルギア(3. 7)に比べ加速性能が向上し、タイムアップが果たせらるうと判断しました。しかし、今まで2速で通過していたコーナーで3速にシフトアップする必要があったりと、乗り方を変えていかなければならず、前日練習会でそれに慣れることが出来るかが問題となります。

そして迎えた8月9日の前日練習会では、試合車両を用いて、5月に行われた全関東戦以来であるダートの感覚を取り戻すべく走行していきました。今回選手を務めたのは、全関東学生ダートトライアル選手権大会同様、加藤、早川、中島の3人です。タイムとしてはまずまずで、他大と比べてもトップレベルのタイムをマークしていきました。試合車両も、メカニックの懸命な車両製作により、加速、減速、旋回性能ともすばらしく、大変乗りやすく仕上がっており、ピット



(今回の試合車両。全日戦より丸目です。) のサポート体制も万全で、3年生を中心に部員一丸となって車両の整備を進めていきました。あとは選手がミスなくそれぞれの仕事をきっちりこなすだけです。



(ピット作業にミスはゆるされません。)

今回の参加校は22校で、1校当たり3人が午前、午後それぞれ1本ずつ走行し、その中でのベストタイムの合計で順位を決定します。昨年の全日本学生ダートトライアル選手権大会は福岡県の大牟田市にあるモビリティおおむたにて行われましたが、走行中にドライブシャフトが折れるといった、トラブルがあり、またコースの習熟不足から、団体7位と低迷してしまいました。しかし、今年わが部のホームコースとも呼べる丸和オートランド那須での大会のため、是が非でも優勝を勝ち取りたいという気持ちで試合当日の朝を迎えました。

そして、開会式が終了し、各校出走していき、いよいよ我が部第1走者、加藤の出走です。各セクションとも無難にこなし、1分36秒359と、しっかりとタイムを残しました。

その後、第2走者、早川のアタックが始まりました。タイムは1分37秒697と無難に一本目を終えました。

そして、午前中の最終走者の中島がスタートします。中島は全関東学生ダートトライアル選手権大会で優勝していることから、全員の期待がかかります。

タイムは1分34秒298と、午前が終了した時点で加藤6位、早川11位、中島2位となり、団体ではトップの位置につけることが出来、良い流れで午後に入っていくことが出来ました。



(出走前の1コマ。緊張の瞬間です。)



(動画分析もその場で行います。)

そして、午後のアタックが始まります。各校軒並みタイムアップを果たす中、第1走者の加藤は無難に決めていき、1分34秒616と、まずまずのタイムを残していきます。その後、第2走者の早川の出走となりますが、出走の直前、わが部と1位を争っていた千葉工業大学が横転してしまいます。これにより、わが部の優勝はほぼ確実にってきました。そして、早川も無難に走り終え、タイムは1分35秒304と、まずまずの結果です。

そして、最終走者の中島がスタートしていきます。今大会における最終走者だけに全員の期待がかかります。最初



の S 字は順調にクリアしていきますが、フリーターンで失速してしまい、後半セクションでも車が暴れてしまいタイムは1分32秒811と、結果としては個人4位で、残念ながら個人優勝は逃してしまいました。しかし、団体では6年ぶりの優勝となり、部員一同勝利を喜びました。

(全日本での優勝！6年ぶりの快挙です。)